

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:10 ~ 10:24

[11教-口-05]

小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果①

投能力と跳能力、心理社会面の変容

*佐藤 善人¹、窪 康之²、佐々木 玲子³ (1. 椋山女学園大学、2. 国立スポーツ科学センター、3. 慶応義塾大学)

10:25 ~ 10:39

[11教-口-06]

小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果②

投と跳の動きの質的变化に着目して

*窪 康之¹、佐藤 善人²、佐々木 玲子³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 椋山女学園大学、3. 慶応義塾大学)

10:40 ~ 10:54

[11教-口-07]

教師の準備運動の機能及び教師の意識に関する研究

効率性と儀礼性に着目して

*秋岡 志保¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-08]

保健体育科教員の授業づくりに関する事例的検討

授業実践の経験の有無に着目して

*石井 郁¹、中川 麻衣子²、米谷 正造² (1. 川崎医療福祉大学大学院、2. 川崎医療福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:10 ~ 10:24

**[11教-口-05] 小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果①
投能力と跳能力、心理社会面の変容**

*佐藤 善人¹、窪 康之²、佐々木 玲子³ (1. 梶山女学園大学、2. 国立スポーツ科学センター、3. 慶応義塾大学)

体力・運動能力の低下、二極化が問題となって久しい。小学校における体育授業はこの状況の改善に貢献することが期待されているが、児童の現状を鑑みるに、十分には役割を果たしていないと思われる。限られた時数の中では、学習指導要領に示された領域の学習内容を実施することが中心となり、体力・運動能力向上に向けた取り組みまでは手が回らないのが現場の実状であろう。本研究では、体育授業における準備運動に焦点を当てる。これまでの準備運動では、いわゆる徒手体操や、ストレッチ効果が期待される運動を実施することが多かった。ここでは、準備運動に運動遊びを取り入れ、児童の投能力と跳能力および心理社会面に変化がみられるかどうかを調査する。なお実施した運動遊びは、(公財)日本スポーツ協会がその普及を推進する「JSPO-ACP」のガイドブックで紹介されている内容から選定した。研究対象は東京都内H小学校4年生102名であった。2024年10月から11月にかけて、計9回の体育授業の準備運動時に、投能力と跳能力に関連する運動遊びを実施した。指導者は、教員免許状を持つ大学院生を中心とした学生であったが、事前に実施する内容を検討し、担任教師に報告して進めた。なお指導の際、特別に投げ方や跳び方の指導は実施していない。運動遊び実施の効果を測定するために、事前事後にソフトボール投げと立ち幅跳びを測定し、変容を分析した。また、運動遊びが児童の心理社会面にどのように影響したのかを明らかにするために、竹中(2016)が作成したプレイフルネス評価尺度を用いて、こちらも事前事後の変容を分析した。その結果、ソフトボール投げの投距離は初回の測定記録下位群の児童が、立ち幅跳びの跳距離は全体、下位群、女子児童で向上した。また、心理社会面にも変容が見られた。これらのことから、準備運動時に運動遊びを実施することの効果を示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:25 ~ 10:39

**[11教-口-06] 小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果②
投と跳の動きの質的变化に着目して**

*窪 康之¹、佐藤 善人²、佐々木 玲子³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 相山女学園大学、3. 慶応義塾大学)

本研究では、体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れることで児童の投能力と跳能力に変化がみられるかどうかを調査した。

研究対象は東京都内H小学校4年生102名であった。2024年10月から11月にかけて、計9回の体育授業の準備運動時に、投と跳に関連する運動遊びを実施した。実施した運動遊びは、(公財)日本スポーツ協会がその普及を推進する「JSPO-ACP」のガイドブックで紹介されている内容から選定した。指導者は、教員免許状を持つ大学院生を中心とした学生であったが、事前に実施する内容を検討し、担任教師に報告して進めた。なお指導の際、特別に投げ方や跳び方の指導は実施しなかった。運動遊びの効果を検討するため、実践期間の前後にソフトボール投げと立ち幅跳びを測定し、それぞれの成果（投距離と跳距離）と動きの質について比較した。動きの質は、前掲のガイドブックに示された評価観点に基づき、ソフトボール投げについては、動き全体の力強さのほか、①ステップ脚の踏み出し、②体幹のひねり、③体重移動、④投げ腕のムチ動作を評価した。立ち幅跳びについては、動き全体の力強さのほか、①準備局面における下肢の屈曲、②腕振り、③離地時の前傾、④着地時の足の姿勢を評価した。

実践前後を比較した結果、ソフトボール投げでは、投距離は実践前における下位群の児童で向上する傾向にあり、動きの質は、体幹のひねりと投球腕のムチ動作が不十分であった児童ほど実践後に向上する傾向にあった。立ち幅跳びでは、跳距離は全体、実践前の下位群、女子児童で向上する傾向にあり、動きの質は、腕振りと離地時の前傾が不十分であった児童ほど実践後に向上する傾向にあった。

これらのことから、体育授業における準備運動時の運動遊びが児童の投能力と跳能力に影響を与えることが示された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:40 ~ 10:54

**[11教-口-07] 教師の準備運動の機能及び教師の意識に関する研究
効率性と儀礼性に着目して***秋岡 志保¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

体育授業で行う準備運動は「儀式と思われるほど形式的(遠山、1974)」などと評され、批判の対象となることがある。「形式」は、屈伸に始まる決められた体操を体育系の号令で全員が秩序正しく行う(中村ら、2016)などの状況を指す。この状況に対し、主運動に即した効果的なもの(遠山、1974)や、主体的な学びとしての導入(中村ら、2016)、楽しさと多様な動きを含む運動遊びを準備運動で行うことも提案されてきた(春日ら、2020)。しかし、「形式を捨て去らない限り、準備運動のねらいや効果をいかに論じても、理論と運動の実際とは結びつかず、準備運動の効果をより高めることはむずかしい(松延、1974、p.363)」とされたように、現在に至るまで議論が継続している。元来、学校は非合理的側面を含む様々な儀礼によって、秩序の維持と効率よい集団運営をしており、儀礼構造は特定の個人や地位によって維持・強制されるものではない(稲垣、2007)。さらに、学校で共通理解する身体的規律を学習させるという任務は、体育教師の「集団行動」指導による実現が期待されている(沢田、2001、p.214-215)。また、教師の効果的なマネジメントは、体育授業の成果にプラスの影響がある(高橋、1992)ことや、定型化された授業行動は、授業の複雑さを軽減し、秩序と安定をもたらす(香川ら、1990)と考えられている。このことから、準備運動の行われ方には潜在的な儀礼の機能や社会的な期待が反映されているとも考えられる。これまでの研究では、運動効果の合理性から形式的な準備運動の否定的側面は捉えられてきたが、教師が捉える準備運動の機能に言及した研究は管見の限り多くない。そこで本研究では、体育授業を行う教師を対象に、準備運動を行う意味に関する質問紙調査を行い、その多様な側面の検討を目的とする。詳細については当日報告する。

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-08] 保健体育科教員の授業づくりに関する事例的検討

授業実践の経験の有無に着目して

*石井 郁¹、中川 麻衣子²、米谷 正造² (1. 川崎医療福祉大学大学院、2. 川崎医療福祉大学)

本研究の目的は、中学校・高等学校の保健体育科教員を対象とした調査により、保健体育科教員の授業づくりの実態と課題を整理することである。学校教育における保健体育科は、実生活で必要とされる知識や技能の習得と、自他の課題に立ち向かう力を養うことが求められている（三浦，2021）。しかし、小島（2020）は、取り扱う運動領域によって授業実践に難しさを感じている教員がいることを報告している。また、石川・村上（2021）は、バスケットボールの授業を初めて取り扱う教員が個人技能の指導に悩みを感じていることを報告している。これらより、本研究では、授業実践の経験がない運動種目を取り扱う際の授業づくりに関する課題を整理する。

本研究では、中学校・高等学校に勤務する保健体育科教員4名を対象とした半構造化インタビュー調査を行う。インタビュー内容は、授業実践の経験がない運動種目を取り扱う際の授業づくりの方法や難しさに関する内容であり、具体的には、(1)回答者に関する内容(2)授業づくりに関する内容(3)授業実践に関する内容である。得られたインタビューデータは質的帰納的に分析した。

4名を対象としたインタビュー調査の分析より、教員歴3年目の教師Aの「初めて取り扱う運動種目では、同僚教員に相談する内容が分からない」という語りから、同僚教員の授業検討の場においても、自身の授業実践の経験が影響することが窺えた。また、教員歴2年の教師Bは、「初めて取り扱う運動種目では、生徒のつまずきが予測できない」と語っており、授業経験がないことで、生徒への指導場面において課題を感じている実態が明らかとなった。さらに、[授業実践の経験がない運動種目]について、教師Aの「発展技や珍しい運動種目では、技能面でも授業づくりに難しさを感じる」という語りから、中学校・高等学校での体育授業の特徴が窺えた。結果の詳細ならびに分析結果については当日説明する。